
紙飛行機にして飛ばす未来 社会人編

大島なるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙飛行機にして飛ばす未来 社会人編

【Nコード】

N7468B

【作者名】

大島なるみ

【あらすじ】

今も思い出すのは、アイツがあのに放った、一枚の紙飛行機……。社会人Ver.です。

行く先が見えなくなったら

今この手にしている全てを紙一枚に託して あの手へと解き放とう
そして 心をもリセットしてゼロの自分をイメージするんだ
紙飛行機にして飛ばした あの手を想って…

「こら、加持くん。何をサボっているのかね！」

やわらかい春の日差しに包まれてうとうとし始めると、その眠りを
一瞬で突き破るような声が、僕の耳をついた。

それは一気に冷水を頭から浴びせられたかのように、言葉よりも何
よりも身体が先に反応する。

「うわっ、はい！す、すみません」

バツと身体を起こして振り返ってみると、そこに立っていたのはあ
の気難しい怖い鬼上司ではなかった。

代わりに自分とほぼ同時期に入社して以来、良きライバル良き相談
相手となっている清水祐哉が立っていたのだ。

清水は僕と目を合わせるなり、いきなり吹き出しお腹を抱えて笑い
始めた。

失礼な奴だ。

「何だよ。声マネなんて趣味悪いぞ、清水」

「ははっ、悪い。いやあ加持の反応が見てみたくてさ。思ったと
おり良い反応おひろめサンキュー」

清水はそう言うと、ニカッと軽く歯を見せて笑った。

人懐こい笑顔…まるで子犬みたいだ。奴に尻尾があったなら、きつ
と今ぱたぱたと尾を振っていたところだろう。

「ま、それも当然かあ。加持の上司おっかねーもんな。相手が男だ

ろうと女だろうと容赦しねえし」

「何を他人事みたいに、お前の上司でもあるだろうが」

「？あれ、そうだったけ」

「……」

こいつは…、僕はどうもこいつと一緒に居ると、ペースを乱されて困る。

「でも、いーじゃん。今日そんな鬼上司も出張で居ねーし、これぞまさに“鬼の居ぬ間に昼寝”ってやつだよな」

それを言うなら“洗濯”だろ。

僕は思わず、心の奥でツツコミを入れてしまう。

清水はそれを分かっていて、勝手に面白おかしく言っているのだ。

そんなだから、僕としては対応に非常に困るのである。

まるで自分が自分じゃなく思えてくるからだ。

「なあなあ、そういうさあ、加持はコレ貰ったか？」

しばらくボンヤリと遠く続く町並みを眺めいたかと思うと、清水は急に振り向いて一枚の紙切れを目の前でひらつかせた。

「なんだ、それ」

僕が尋ねると、清水はいたずらっぽく笑みを浮かべた。

「何って、異動希望調査票だけど」

「そんなもんあったっけ」

「あれ、キョーミなし？」

「だって、んなもんあったところで、人手足りなくなりやそっちに飛ばされる…それに本人の意志もへったくれもないだろ。無意味じゃん」

「はあ…相変わらず考え方が暗いねえ加持くんは」

自分でも皮肉めいた言い方をしてしまったことは分かっていた。

それに追い打ちをかけるかのように、清水は言ってくる。全く抜け目のないヤツだ。

清水は大げさに両肩をすくめたため息をつく、言葉が続けてきた。

「あのな、こういうもんは考えようによるんだよ。確かに異動は

希望が通らなきや理不尽だろうけど、こういうもんでそうならないように、根回ししとくってテもあるだろ？
使えるものは何でも使わねえと損だぜえ」

「清水：お前も相変わらず策士だよな」

「はっはっそうか？ いやあまいったなっこりや」

誉め言葉じゃないっつーの！

と、思ったけれど口には出さなかった。

「まあそれでも、その時が来りゃどこそこ関係なく飛ばされる云々
つてのはさあゝ…正直、ちょっと分かる気イするわ」

「…清水？」

それは清水にしてはか細い声音だったような気がする。

僕はほんの少しそれが気になって聞き返してみたが、答えは返って
こなかった。

問いに答えない代わりに、清水がある行動に出始める。それはこれ
また予想だになかった行動だった。

ガサリッ。

今まで指先で弄んでいた紙切れを、風に煽られながら一折り一折り
丁寧に折り始めたのだ。

と言っても、思えばここは屋上だ。

周りに張り巡らされたフェンスの手摺りですら、折り紙に適してい
るとはお世辞にも言えない。

「…おい、清水」

そう問い掛ける僕の声を気持ちいいくらいに無視して、清水が夢中
になり（本当にそうかは分からないが）折り上げたものは、一枚の
紙飛行機だった。

「じゃーん！完成」

作り終えた後、清水は満足そうにそれを掲げる。

その表情はまるで新しい事を発見した時の子供のようなのだ。

清水の表情は、男は心の奥にずっと少年のような部分を持っている
という説が、あながち嘘ではないと思えるほどのものだった。

「不安定な所で、これだけ精巧に作れるってすごくない？職人技だ
ぜ、これ」

「にわかの、な」

「あ、ひでえ」

「だって、角つぶれてんじゃん」

「仕方ないだろ。平らなところではないし、ここまで出来れば上出来」
清水は本当にその紙飛行機の出来栄えが気に入ったようだ。それを持つ手首をクイクイツと捻っては、出来栄えを吟味している。

…幸せな奴だ。

「あのさ、何でいきなり紙飛行機なんて思いついたワケ？」

無邪気さ極まる清水を前に、僕はため息をついて尋ねてみた。
どうせ、また答えねえつもりかもな。そう思いながら。

でも今度はそうではなかった。

「そんなん、いちいち理由あるかよ。思い付きよ、思い付き」

「…だよな。そう言うと思った」

「なら聞くなよ」

「で、どうすんの？それ。清水、書いて出すんじゃないのかよ」

「……」

僕が聞くと、また返事は返ってこなくなった。

何なんだ、一体。

そうは思ったけれど、言うに言えなかったし聞くに聞けなかった。

今日は清水には、どこか僕の入り込めない一面があるように思えて仕方がない。

さらにその感覚を増大させたのは、清水が口にした次の言葉だった。

「なあ、加持はさ。1年後や5年後の自分って、どうなってると思う？」

「は？」

「そういうの考えたことある？」

それはあまりにも突拍子もない質問で、僕を唸らせるには十分なものであった。

「：うーん、そりゃガキの頃は良く考えたけど。今はなあ：いつ何がどう転ぶか分かんねえし」

「お前、現実主義だなあ」

「そういう清水はどうなんだよ」

「オレ？：まあ、正直似てる考えもあるけどな。ただ：」

「ただ？」

「“こうなってる”って思うよりも、“こうなりたい”って考える方かもしれない」

「そりゃ随分と前向きで：」

「前向きにでもなんなきゃ、やってらんないだろ。グダグダ悩んでたって、どうしようもないことはある」

「：清水、なんか言ってること矛盾してきてるぞ」

「あんな、続きがあんの。最後まで聞いてくれよ。」

：だからさ、どうしようもないことを、どうにかしていこうって考える。それがこの先の自分に出会う最大の近道なんだ、とオレは思うわけよ」

清水はそう言って、トンと軽く手摺りから身を乗り出すと、少し腕を引いてタメた後、フツと遠く目がけて手に持っていた紙飛行機を飛ばし放った。

清水の手から放たれた紙飛行機は、ゆるい上昇気流の中、自由気ままにふわりふわりと漂って、はるか彼方へと向かっていく。

「おゝ意外と思ったより飛ぶんだなあ」

妙に感心したように間延びした声を清水が上げる。

それでもやがて紙飛行機はゆっくりと下降し始め、太陽の逆光も手伝って、視界にはすっかり映らなくなってしまった。

でもそれでも、清水はまだその場を離れようとする気配は感じられなかった。たった一言ですら口にすることなく、ただただ紙飛行機が見えなくなった地点を眺めているだけだ。

やはり今日の清水はどこか何かが違っている。いつもひょうきんで明るすぎなくらい明るくて、しょうもないボケをかます奴だと思っていたけど。

そんな清水だって、きっと誰にも言えずに人知れず悩んでいたりするのかもしれない。

「なあ：清水」

僕はそう話し掛けてみたものの、正直何を言ったら良いのか分からなかった。

冷静を装っておきながら、本当に肝心な時に僕は何も出来やしない。うすうすは分かっていたけど、それでは何か言いたくて仕方なかった。

でも結局は言葉がそこで止まってしまい、しまいには

「なんつく顔してんだよ」

情けねえ面、と清水が悪態つく方が先だった。

きっとこの時の僕は、清水の言う通り、本当に情けない面をしてたんだろうと思う。

でも裏を返せば、これは清水のせいでもあるのだ。

清水は自分自身じゃ気付かなかったのかもしれないけど、僕に悪態をついた時の清水の表情は、どこか物悲しかったから。

「んじゃ、紙飛行機も見えなくなっちゃったことだし、そろそろ持ち場に戻りますか。何だかんだ文句垂れても、やることはやんねとなっ」

僕がどこか切なくゆるみだした表情を引き締めようと唇を噛み締めていると、清水はそんなことを言いながらグッと両手を上で組み、背を反らした。

もうこの時には、いつものひょうひょうとした清水に戻っていて、僕はそんな清水を見て少しホッとして、でも少し淋しくもなった。

踏み込まずにすんだ安心感と踏み込むことが出来なかった淋しさと
：でもいつもの清水が僕は好きだったから、これ以上踏み込まずに
いよう：そう思った。

「清水からそんな真面目な言葉が聞けるとは」

「あらあ、またヒドイこと言って、オレって意外と真面目なのよ？」

「はいはい」

「あゝこいつ、かるくあしらいやがって。このやろゝ」

「いててて！やめろって」清水はそう言いながら、僕に軽くラリア
ットをかましてきた。

Last.

子供の頃は良く遊びでやっていたけれど、大の大人となるとその力はさすがにキツイこともある。

でも、僕はもっと早く…いや、この時にでも知るべきだったと悔やんでならない。

こうしてふざけあうことの出来る時間が、どれだけ幸せでどれだけ大切だったのか…。

そして、その為に僕は聞きそびれてしまった清水の本心を、切に思うようになってしまったのだ。
なぜなら…。

「よしっ、出来た」

それから少したったある日の夕暮れ、僕はまた屋上で一時の一服を
もくろんでいる。

そこには清水の姿はない。今回は本当に1人だ。というより、1人
になってしまった…という方が正しいのかもしれない。

あれから数日後、清水祐哉に移動辞令が出された。本当に間もなく、
というタイミングで。

『じゃあ、皆さん。お元気で』

職場を去る時も、本当にあっさりと、それなのに余裕めいた笑顔ま
で浮かべて。

颯爽と清水は行ってしまった。

まるで、こうなることを分かっていたみたい。

でもその理由を、僕は清水以外の他の誰よりも知っているような気がした。

あの日清水が口にした言葉は、きっと全て自分自身への覚悟だった

のだ。

僕に気付かれるくらいに不安と寂しさを内に秘めながら、それでもあいつはあいつなりに悟られることのないように、自分を保つていたのだろう。

“グダグダ悩んでたって、どうしようもないことはある。だから、どうしようもないことをどうにかしていこう、って考える。それがこの先の自分に出会う近道なんだ”

この言葉を糧にして…。

「ただのお調子者じゃなかったんだな」

僕はそうつぶやいて、くすりと笑う。

今ここに清水がいたら、きっと

「相変わらず手厳しい意見だねえ」なんて、ふざけた口調で言うてくるに違いない。

「あゝあ、負けてらんねえな。俺も」

そうつぶやいた後で、僕は軽くフェンスの向こうに身を乗り出す。

そして、手にしていたものをスッと解き放った。

それは、あの日清水が作って飛ばしたものと同じで、ただ明らかに清水が作ったものよりも僕のそれはいびつだったけれど。僕はそれでも同じように、いびつな紙飛行機を飛ばしたのだった。

清水：今、お前はどんな未来を歩いてる？

そして僕は、この先どんな未来を歩くのだろうか…。

答えはまだ見つかりはしないけど、今度清水に会う時までには一味違った自分でありたい。

そう思いながら、僕は今は遠くにいる懐かしきライバルを思い、遠き未来への自分へと思いを馳せた。

夕日に向かってゆっくりと飛行していく、あの紙飛行機を眺めながら…。

E n d .

L a s t. **(後書き)**

ご拝読ありがとうございました！これは私自身が人事異動になった際に感じたこと、思ったことが要となっております。似たような体験をした方、そうでない方も感じ取れる何かがあれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7468b/>

紙飛行機にして飛ばす未来 社会人編

2010年10月8日22時17分発行